

文芸誌『スバル』における「椋鳥通信」

——一九〇九年のスピード——

山口 徹

『スバル』における「椋鳥通信」

森鷗外による「椋鳥通信」は、国外の新鮮な情報を多様なジャンルにわたって報じた翻訳消息記事である。質量ともに同時代に類例を見ない傑出したものであり、創刊されたばかりの月刊誌『スバル』(一九〇九年一月〜一九一三年十二月)第三号から終刊まで、三回の休載を挟みながらも五十五回にわたって連載された。『スバル』廃刊後は「水のあなた」と改題され、雑誌『我等』創刊号(一九一三年十二月)から九回にわたり継続された。主要な情報源としては、鷗外が定期購読していたとされ、またじっさいに「椋鳥通信」の中にもその名が見られるドイツの日刊新聞 *Vossische Zeitung* や *Berliner Tageblatt* などの名前が挙げられてきた。しかし、ドイツ語・フランス語・英語など各国の言語の入り交じる記事の中にはフランス、イギリス、イタリアなどで刊行されていた誌名も散見される。私信を含め、複数の情

報メディアを経由して編まれたものであることは明らかだが、その特定は今日なお困難であるほど入り組んだ形態となっている。

『スバル』創刊時の第一号、第二号にあって、「椋鳥通信」の名称は見えず、当初は「海外消息」として「予告」、国内の「消息」、同人による「寄合語」などと併置され雑録欄に収められていた^①。その『スバル』第二号紙上では、平野万里とこの号の編集者である石川啄木とのあいだで活字の大小をめぐる^②の抗議、応酬がおこなわれた。平野の不満は五号活字たるべき短歌が六号に、「本来六号なるべき筈の雑録」が五号に組まれたことにある。読書界や同人・文壇内における作家のポジション、原稿料などと直結する問題だけに活字の大小をめぐるトランプルは深刻化する傾向があり、そもそも北原白秋ら若手が『スバル』の前身である『明星』を離れ始めたきっかけは、一九〇八年新年号に蒲原有明、上田敏、薄田泣菫らの詩が四号で麗々しく組まれたのに対し、社中のものがそれが五号二段組で片付けられたことに憤懣を抱い

たことにあったと言われている。うぶごえをあげて問もない『スバル』にとって、誌上に表面化した平野と石川の対立は、ふたたび内部分裂をまねきかねない重大問題であった。第三号以降、雑録欄が六号活字に落とされたのは、こうした危機的状況を回避するためであったと推察されるが、「海外消息」だけは五号を保ったまま「椋鳥通信」として生まれ変わる³。

「椋鳥通信」は、ドイツ在住の「無名氏」からの通信として体裁をあらたにただけでなく、それまでほとんど芸術思潮に限られていた範囲を、政治、科学技術、三面社会記事など多方面に及ぼし、質、内容ともに一新した。また、半年以上前の情報も載せていた「海外消息」にくらべ、「椋鳥通信」の伝える情報は総じて一ヶ月半から二ヶ月程度と、その鮮度も飛躍的に高められた。このような大幅な改良があったとはいえ、通信を装うこの海外情報記事だけが五号を保ち続けたのはなぜだろうか。おそらくその理由は、ドイツ在住の「無名氏」を気取る、『スバル』の盟主森鷗外の活字を落とすなどということが編集・同人内部においてなされるはずもなかったためであろう。そしてこれ以降、遠くドイツから無名氏が放つてよこす伝書鳩ならぬ椋鳥は、巻末の雑録欄からも羽ばたき出て独立した著述となった。

「椋鳥通信」は、諸外国における文化現象・社会風俗・最新流行といった、日本の新聞には登録されにくい幅広い雑多な情報までをも広範かつ迅速に伝えた。『スバル』を受信した者たちが、超越的な情報ターミナルとしての無名氏の実像に興味を寄せてから、森鷗外とい

う解答を導き出すまでそれほどの時間がかからなかったことについてはすでに、松木博の指摘がある⁴。そこでまず「椋鳥通信」が実現し利用もした、当時の革新的な速度イメージについて確認していくこととする。具体的には、十九世紀後半から二十世紀前半にかけ急速に「一体となった世界」(E・J・ホブズボーム⁵)を成立させた情報ネットワーク(とりわけ郵便物のシベリア鉄道利用)、および『未来派宣言』を参照する。そのうえで本論は、『スバル』に繰り返されるあるひとつのトピックに着目することで「椋鳥通信」の速度の相対化をこころみたい。

一 一九〇九・二・二〇パリ発『未来派宣言』およびシベリア鉄道の郵便利用

今日から見てももっとも二十世紀的であるといえる速度の美、それをさらに加速させる科学技術の発展を強力に支える戦争を過激な形で礼讃したマリネッティの『未来派宣言』。過度に高揚した調子とはいえ、起こりつつあった世界の本格的な変動を言語化したこの声明は、拡張・高速化する情報メディアを媒介とすることで、増殖しつつある大衆の欲望を刺激した。フランス語で書かれたこの宣言は、文化首都パリにおいてもっとも影響力のある新聞のひとつであった『ル・フィガロ』一九〇九年二月二十日付の第一面全面を覆い、一九一二年までに世界のあらゆる主要な言語に翻訳された⁶。なかでも地理的にも言語的にも遠くはなれた日本の、同年三月十二日発「椋鳥通信」(『スバル』

第五号、五月一日発行)に宣言の趣旨そのままの速度をもって伝えられたことは、未来派研究の分野においても特筆すべきこととして評価されてきている。これまであまり論じられてこなかった「椋鳥通信」だが、この点によってその名が知られるところとなつてゐる。長谷川泉は、鷗外訳の未来派宣言が、同時期に刊行されていた『軍医団雑誌』の情報網を介して伝えられたものであることを紹介している。この指摘をふまえつつ、関連資料を参照しながら「椋鳥通信」における未来派宣言抄訳の意義についてあらためて考えてみる。

『軍医団雑誌』通信欄で、鷗外は国外の軍医正から送られてきた手紙と同封された新聞・雑誌の切り抜きを編集して紹介していた。未来派についての記事は、第二号(一九〇九年四月三〇日発行)の、当時ベルリン留学中の佐藤二等軍医正からの報告(三月九日付け、これは発送日と考えられる)に含まれていた。数種の切り抜きのなかにあった「其他伊国詩人ノ気焔」について鷗外は、「伊太利詩人ノ記事ハ団員一般ニハ興味ガ有ルマイト思フカラ略シテ置ク、一言デ言ヘバ Marinetti と云フモノガ未来主義 (Futurismus) ト云フモノヲ発表シタノデアル、『速力』ヲ表現スル詩ヲ要求スルノデアル、自動車流行時代ノ主義デアル、日本ニガヤク云ツテ居ル所謂自然主義ヨリハ少シハ気が利イテ居ル」と伝えた。

『軍医団雑誌』もまた『スバル』と同じく一九〇九年に創刊されたばかりの雑誌であり、第一号(三月二〇日発行)巻頭「分団長ニ示ス辞」で鷗外は、「(前略)今ヨリ後此ノ雑誌ハ更ニ一ノ Correspondenz-

文芸誌「スバル」における「椋鳥通信」(山口)

雜誌ヲ通信機関タル性質ヲ具フヘキナリ雑誌ハ五千ヲ超ユル団員ノ戮力ニヨリテアラユル方面ニ發展セシメンコトヲ期スト雖得ニ此ノ一面ヲハ新ニ開拓スルコトヲ要スルナラム是レ本号ヨリ通信ノ一欄ヲ設ケタル所以ナリ 陸軍軍医団長 医学博士 森林太郎」と述べ、雑誌の方針を明確に指し示した。同月発行の『スバル』に無名氏として「椋鳥通信」を連載しはじめると同時に、陸軍軍医のトップとしても『軍医団雑誌』に「通信機関タル性質」を「新ニ開拓スルコト」を強力に推進しようとしていたことがわかる。一九〇一年のマルコーニによる大西洋横断無線通信の成功以降、瞬く間に世界を緊縮化しはじめた情報ネットワークとその速度イメージを最大限に利用し、さらにはネットワークをみずからの手で整備し、拡張していくことで、伝達の速度、量、質を高めていこうとする鷗外の実践自体がマリネッティの『未来派宣言』とびたりと呼応する一面を持っていることは疑いなくところだろう。前号までの「海外消息」に比べ、「椋鳥通信」が躍的にその速報性を高めたことについては冒頭でも触れたが、この高速化を実現可能にし、鷗外の「開拓」意欲を駆り立てた具体的要因は何であつたらうか。

第二回以降、「椋鳥通信」は「むく鳥通信」と表記されたがその理由については次のような興味深い叙述がある。「前便の通信は、誰か社中の人がいたづらに『むく鳥通信』とした所が、木扁のむくの字が無いと見えて、掠めるといふ字になつた。或は情深い植字方が、わざと直したのかも知れない。Siberia 鉄道で、帰る雁を掠めて行つた通

信だとも見てもらつても好いのである」。シベリア鉄道によって、それまで海路(東回り)と西回りがあり、太平洋を渡る東回りの方が速かつた)で一ヶ月から一ヶ月半掛かつていたヨーロッパと日本との時間的距離は一気に半減されることとなった。とはいえそれまで船で乗り継ぎをしていたバイカル湖の迂回線が開通したのは一九〇四年と日露戦争の只中であるように、戦時利用のため急ごしらえされた路線が当初から安定かつ自由に国際利用されたはずもない。一九一六年の完全開通に至るまでシベリア鉄道の運行状況はおおきな改良段階にあったわけだが、一九〇九年前後のシベリア鉄道經由の国際郵便については次のような資料があり、戦後の混乱が一段落した一九〇七年あたりから利用の拡張整備がおこなわれたことがわかる。

一九〇七年一月一日「報知新聞」

従来西比利亞には未だ外国小包郵便業務の施設なかりしが逓信省に於いては露国郵政庁と協議を遂げ今回浦塩斯德を経て同地と重量一貫三百三十三匁(五キログラム)迄の小包(金額三千法までの価格表記小包をも)の直接交換を開始し同時に従来英、仏、独の各国の媒介により交換したる歐羅巴露西亞発着の小包も亦西比利亞經由通送せらるゝことゝなれり右本邦発料金は重量一貫三百三十三匁迄西比利亞宛てのものは金一円歐羅巴露西亞(芬蘭を含む)宛てのものは金一円五十錢なりと云ふ。

一九〇九年一月三日「中外商業新報」

従来西比利亞經由通常郵便物の通送に付ては継越料の関係上欧州諸国に於ても印刷物以下の郵便物の外西比利亞を利用せざりしが今回公衆の便宜を計り率先して印刷物以下の郵便物の西比利亞便に依る差立を開始することとなり尚智利宛郵便物も西比利亞經由にて差し立つるを得ることゝなれり依て来二月十一日以降西比利亞經由と指定し差し出したる郵便物は其取扱いを為すと云ふ。

一九〇八年春パリにいた上田敏から妻悦子に宛てた手紙(二月十五日パリ発)三月七日東京着)の文中には「手紙の状袋の上の左端へ Via Siberia 即ちシベリア便にすれば、三週間にて手紙は着すべし、この手紙もやはり其便に候」とある。つづく手紙(二月十八日夜筆、十九日パリ発)三月一日東京着)には、「二月廿日午後の御手紙はシベリア便と明記してはなけれど幸にして其便にて来りしものと見え、昨夕大使館へ来着、今日転送し来つてうれしく拝見仕候、森先生より一月廿七日の手紙も今日倫敦大使館より転送して到着仕候」という記述もみえる。悦子の手紙よりちょうど一週間後に発送された鷗外からの手紙がロンドンを迂回しながらもほぼ同時にパリに届いている。全集所収の書簡を見るかぎり、三月八日ウィーン発)二十三日東京着、七月二十一日パリ発)八月三日東京着のように二週間で配送されることもあったものの、敏の言うように三週間前後のものが多い。また「本年三月十八日横浜を出發し六月二十一日敦賀に帰着したる朝日新

聞主催世界一周会の顛末を叙述したものと、という『世界一周画報』(石川周行 一九〇八年九月)によれば、六月二日にベルリンを發した一行はワルシャワ、ペテルブルクなどを觀光し、シベリア鉄道には七日モスクワから乗車、十八日にウラジオストク着、敦賀には二十一日に到着している。この旅行記の中に「去年迄は此処にて二時間も三時間も停車したるに僅に一年の間に斯の如き改良を見たるは、露國もなかく／＼えらしと云ふべし」「西伯利亞線は本年五月一日より時間表を改正し、以前よりは一日早く着ることとなり居たる為、斯く予定よりは一日早く着したるなり」と、シベリア鉄道が漸次改良されていることに感嘆する記述がある。

このように、刻一刻と實現されていったシベリア鉄道による時空間の短縮こそ、鷗外を刺激し、速報性の高い「通信」へと駆り立てたものではなかったか。その実践は距離を消去しようとする速度への飽くなき意志とでも呼びうるものであり、この強い欲望こそ「椋鳥通信」の底流に潜むものである。欲望は虚飾された部分にこそよく現れる。たとえば、創刊二年目の『スバル』第九号から第十二号までの「椋鳥通信」には「むく鳥電信」なる後追情報が付加えられた。これまでの「通信」がその最終的に發せられた日付より一ヶ月半から二ヶ月ほど後に刊行される『スバル』に掲載されたのに対し、「電信」はその期間を一ヶ月弱に短縮した。とはいえ両者には著しい内容・書き振りの相違もなく、ともに郵送された情報という点で変わりない。通信で一度締め切られてからの情報を「電信」と称したわけだが、この用

語により、鷗外はドイツに在留する無名氏という虚像に加え、「電信」というメディアによる圧倒的な速度イメージをたくみに利用した。未だ派宣言の逸早い紹介というトピックもあって神話化されがちな「椋鳥通信」の速度だが、虚飾された相対的な速度であることから免れはしない。この相対性を計るうえで『スバル』には興味深い記事がある。以下に見たい。

二 無名氏と高村光太郎、そしてやさしきアンリ

『スバル』には、それまでの文芸雑誌と一線を画すことになったはずの注目すべき企画があった。實現されれば、ヨーロッパ在住を装う無名氏による海外消息と呼応してもっと大きな衝撃をもたらしたにちがいないその企画は、パリ留学中の高村光太郎からの創刊以降毎号の連続寄稿である。主だった同人の動向を伝える創刊号の消息欄のなかに「高村光太郎君は巴里に健在、いよいよ今冬より制作に取りかからる由に候、又本誌へは毎号述作その他を寄せらるる約に候ところ本号の間に合はざりしは遺憾に候」とある。一九〇〇年の万博をピークに凋落気味であったと言われるもの、まだまだ世界の首都であったパリを文才ある若き芸術家が活写した文章(画)が、極東の雑誌に即時掲載されるという未曾有の企画が創刊前から企てられていたのである。ところがこの計画は、勝手知りたる日本に戻って制作をおこなうという光太郎個人の突然の決断によって頓挫することになった。『スバル』同人がこの光太郎の心交わりを知るのは第四号雑録欄に掲げられた

「巴里より」と題する一文によってである。

拝啓、先日昴初号拝受仕候。小生其後御約束に、そむき居り何とも心苦しく存居候へ共、種々の都合によりて、小生今夏一旦帰国いたさねばならぬ事と相成候為め、目下非常に忙がしく、草稿を清書いたす事すらむつかしく候次第に有之候。何卒右御賢察被下度願上候。

帰国は多分今秋に相成る事と存じ居候。右一寸御断り申し置き候。又近日申上可く候。

カチユール・マンデスの斃死にて巴里は目下大騒ぎに候。両コケランも死して劇界に非常な影響を及ぼし居り候。モンナヴンナのオペラ興行につきメエテルランクの訴訟も問題に候。

興味深いのは、この光太郎の託状に申しわけ程度に添えられたパリの最新文化情報である。というのも、ここで伝えられる「両コケラン」と「カチユール・マンデス」の訃報については、「椋鳥通信」も報じているのであるが、以下に述べるように、両者には情報の伝達速度と質の違いがはっきりと認められるからである。「両コケラン」とはフランス演劇史に名を残すコ克蘭兄弟(兄 Benoit Constant Coquelin 1841-1909 兄を意味する aîné という愛称で親しまれた。弟 Ernest Alexandre Coquelin 1846-1909 弟を意味する cadet の愛称で呼ばれた)のことで、兄のペノアは、この人物のために戯曲家ロス

タンが名作『シラノ・ド・ベルジュラック』を書いたとされる不世出の個性派俳優である。ペノアは一月二十七日、エルンストは二月八日と相次いでこの世を去った。

無名氏はまず、光太郎に一号先んじ、『スバル』第三号に掲げた記事「(一九〇九年一月十六日発)」の冒頭で、「一九〇九年一月になってから巴里の名優 Coquelin sen が六十八歳で肺炎に罹つて死んだ」と伝えた。しかしここで「sen」と呼ばれる兄ペノアが死亡したのはこれより九日も後のことである。この訃報が誤報であったことは、翌月の第四号の記事(二月六日発)からも確認される。「肺炎で永く煩つた為めに誤つて訃音を伝えられた巴里の名優 Constant Coquelin (前便参照)は、とうく一月二十七日の朝本當に亡くなつたさうだ。卓に寄りかかつて稽古をしてゐる間に卒倒した切であつたのだ。年は六十八歳である。Matinに独逸帝が大きな花束を墓に供へさせたと言いてある。何にも好く手をお出しになる事である」。しかし、この記事にもまだ誤解がある。コ克蘭兄はここで伝えられたように芝居の稽古中、突然他界したのであり、精神を患って永らく入院し、兄の後を追つたのはコ克蘭弟のほうである。おそらくこの時点で無名氏はコ克蘭が兄弟であること、つまり弟の存在を正しく知らなかった。それはマンデスの斃死とあわせて報じた翌第五号の記事「巴里では俳優 Coquelin jun. が頓死した。余り早く父の跡を追うたと噂せられる」(二月十二日発)にはっきりとあらわれている。フランス語では aîné と cadet は兄弟関係などにおける上下関係を示し、通常、親子関係に

は用いない。つまり「俳優 Coquelin jun.」は「父の跡を追った」わけではない。ところが「ainé」を「sen」「cadet」を「jun.」と置き換えた状態で受容した様子の無名氏は、これを父子と誤解した。第三号から第五号にわたる無名氏のため重なる誤解が解けるのは、ようやく第六号（四月五日発）のことで、コ克蘭兄弟死後の反響を次のように詳しく報じている。

巴里で亡くなった俳優両 Coquelin に就いて、いろいろ記事が出る。兄の方、Coquelin ainé⁽⁴⁴⁾ (Constant Benoit Coquelin) の死んだのを、Suzanne Després⁽⁴⁵⁾と云ふ Ibsen 劇を得意とする女優が、「Coquelin の死はわたしには何でもない」と云つたことが Martin の紙上に出たのは、大いに人を驚かした。老 Coquelin は新派の俳優ではない、これは実情であらう。併し女優の Réjane と同じく、此男は或る時代の代表者である。風采は頗る揚らず、小さい目、鈍い鼻で、市井の一男子を見る如くであるが、談笑の間に、其顔の表情が、へな土に名匠の篋が触れるように変化するを見たら、誰も尋常の人間とは思はなかつたらう。舞台上上ると、あらゆる技巧に於いて自在を得てゐることは無類であつた。Rostand の Cyrano de Bergerac は此男の為に書いたといふ評判だが、あれに扮して鼻の講釈をする所などは、いつも満場の喝采を博するに極まつてゐたのだ。扱次いで亡くなつた弟 (Ernest Alexandre coquelin)⁽⁴⁶⁾ は Coquelin cadet で通用してゐる

た。もう余程前から Château des Suresnes の Maison de Santé に入院してゐて、院内で死んだのではあるが、惜まれたことは盛に惜まれた。兄と同じく Molière の流を汲んだ男には違ないが、弟の方には現代的の所があつた。Montmartre の頂から吹く風が其人物に或る生気を賦与したのである。

これまでのことから、以下のことが確認できる。光太郎の「巴里にて」が掲載された第四号の時点で、無名氏はコ克蘭兄弟の存在を正しく認識していなかった。そうした誤りを含みながらもコ克蘭兄弟の死（一月二十七日）については報じることができたが、マンデスの轢死（二月七日）については翌月の第五号まで記事にすることはできなかった。一方、発信日時こそ不明なもの、現地には光太郎が「両コ克蘭」の関係を誤って理解していたはずもなく、またマンデスと二人のコ克蘭の死を無名氏より一号前の第四号に伝えた。このタイムラグが正確にどの程度であり、またどのように生じたか詳細を知ることにはできないが、フランス国内の事件を直接伝える個人の発した日本語情報と、月に一、二回程度にまとめられて輸入されたとみられる新聞メディアを仲介し、さらには翻訳という手続きを取った無名氏の情報とでは伝達のスピードと正確性に格差が生じたのはいたしかたないところだろう。同時代の世界的都市を活写するにはあまりにもわずかな分量、それもたった一度ではあるが光太郎の文章がここで果たした役割は創刊に際してもくろまれた『スバル』の姿を想像させる。⁽⁴⁷⁾

それにしても第五号の時点でもなお無名氏がコ克蘭兄弟について誤認していたことは雑誌『スバル』および「椋鳥通信」の速度と性質を探索うえで注意される。というのも、『スバル』第四号雑録欄には、コ克蘭兄弟とマンデスの計報について伝えた記事がもうひとつあるからである。「やさしきアンリの手紙」と題された冒頭、「やさしきアンリは巴理に居る。巴理から月に一度手紙をよこす」とあるように、この手紙は在仏する人物の見聞した文化情報(フランスを中心とする)を、受信者が編集して紹介する体裁を採っている。光太郎の「巴里より」のように手紙の文面そのままというわけではない。結末には「(二月十五日於巴理、汝のやさしきアンリより)」と、同月号の「椋鳥通信」より九日遅い情報の発信日も添えられている。「月に一度手紙をよこす」とのことだが、その後『スバル』誌上に現れることはなかった。この手紙の中に、「マンデスは東京でも人が話すだらうとて、アンリは多く書かぬと書いてある。コンスタン・コックラン Constant Coquelein^(カ)を失ひ、Cadet^(カ)と人が呼ぶ Ernest Coquelein^(エルネスト コックラン)を失つて巴里の梨園は大打撃を蒙つた。マンデスの死骸は二月十一日の朝の十時に葬られた。アンリは葬式を見たを書いてある」という叙述がある(マンデスについてはこの前後でさらに言及している)⁽⁵⁾。日本国内にいた無名氏(鷗外)は、次の「通信」を書くまでにこの誤謬少ない記事を眼にすることはできたわけだが、結果としてアンリの情報が第五号の「椋鳥通信」に活かされることはなかった。

以上のように、現在から見れば、フランス人俳優兄弟の相次ぐ死と

ひとつにまとめられるトピックについて『スバル』第四号には、内容の上でも体裁の上でも三種三様の記事が掲載された。固有名についてだけでも、光太郎は「両コケラン」、無名氏は「名優 Coquelein^(カ) sen」、アンリは「コンスタン・コックラン Constant Coquelein^(カ)」および「Cadet^(カ)と人が呼ぶ Ernest Coquelein^(エルネスト コックラン)」と、三つの言語が入り交じり、三つの異なる伝達経路、三つの異なる速度が混在していることが浮かび上がる。

三 椋鳥が羽ばたく重層的な時空

宗像和重は、一八八八年当時ベルリンに留学中の若き鷗外が『読売新聞』に「政海の波瀾」と題する通信文を寄せていたことを探り出し、『舞姫』(一八九〇)の太田豊太郎が通信員として描かれたことと重ねあわせ論じている⁽⁶⁾。友人相沢の紹介で(海外通信員としてドイツの幾百種の新聞雑誌に目を通し、日本の新聞に原稿を書いて送る豊太郎は、「我学問は荒みぬ」と繰り返しながらみせるもの)、「今まで一筋の道のみ走りし知識は、自ら総括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に至る」と描かれていた。『スバル』創刊より二十年も前のことであり、「通信」の速度、発信場所、性質、意義もまったく異なるが、若き日の鷗外と太田豊太郎の姿は、海外の新聞雑誌記事を『スバル』という日本の雑誌へと総括的に翻訳してよこす無名氏の虚像ともよく合致する。もっとも、時代の最先端を追おうとする無名氏の実践には、かつての自己の経験を反復してみせると

いった逆向きの時間層が混入している。「椋鳥通信」はヨーロッパ芸術文化の速報的紹介という一面を軸に評価されてきたが、その領域は政治、軍事、科学技術はもとより、探検、醜聞、猟奇的殺人事件など多岐にわたっている。なかでも本論の着目してきた速度に関しては、アムンゼンらによる極点到達競争、エッフェル塔からの遠距離無線電信の実験成功、七十年間に各国で敷設された鉄道の距離、普及しはじめた自動車の事故、世界に限なく連絡された海底ケーブルの状況などつきつきと挙がり、圧倒的な規模とスピードで世界を緊縮させた事象に対する鷗外の強い関心が伺い知れる。格段の進歩を遂げつつあった速度を知ろうとし、その速度を通信として表現しようとした「椋鳥通信」であるが、虚構ゆえの事実誤認や相対的な遅れを生じざるをえなかった。

無名氏と名乗り匿名性を強調した情報空間でありながらじつは一人の著名な作家の編集翻訳作品であること、世界の最新を追う行為でありながらかつての自己の経験を反復するような行為でもあったこと、情報源・言語・伝達経路が多様であることなど、「椋鳥」は複合化合物コンプレックスとして多様な表情を見せる。この海外通信は簡単に剥がされてしまいそうな誇張の皮膜を幾重にも作り出す一方、江戸の言葉で田舎者を意味する「椋鳥」を称することで自身のコンプレックスをあからさまにしている。⁽⁶⁾「椋鳥通信」という名称は、ドイツ在住の人物が世界の田舎である日本に発信した速報というフィクションを立ち上げもしたが、日本に住む田舎者が受信し編集した海外消息という現実的な自己

文芸誌『スバル』における「椋鳥通信」(山口)

認識を表現してもいる。権力の周縁にあったもののベルリンの中央にいた過去の自分、権力の中枢にあるものの世界の中心から遠く離れてしまっている現在の自分、そうした鷗外の自己認識のうえに空間的距離を短縮させ、時間的な遅れを取り戻そうとする速度への欲望が芽生えていることを読みとることができる。このとき問題となるのは、鷗外が自己努力として海外消息を受信したというだけではなく、それを翻訳し編集し発信もしたことである。同じ雑誌のなかで、より迅速でより正確な情報と競合することもあったこの行為には啓蒙という言葉になじまない不安定さ、批評としか名づけえない果敢さがある。休載はわずかに三回。頑固なカモメが放ちつつつけた椋鳥は、西洋の時間と日本の時間、物流による情報速度と電波による情報速度というまだまだ錯綜したクロノスの狭間にぼんやりと浮かんでみせる。そうした椋鳥の幻影を『スバル』という星雲のなかで捕えようとした人々、とりわけ小山内薫、上田敏、高村光太郎、やさしきアンリ、平野万里、石川啄木、江南文三、木下柰太郎、与謝野鉄幹、永井荷風を接続する知のネットワークからは、カモメと椋鳥が羽ばたく重層的な時空の複雑な相貌が浮かび上がってくる。⁽⁷⁾

注

(1) 「椋鳥通信」を収録する最新の岩波版全集第二七巻(一九七四年)もこの時点のものとは鷗外単独の手によるものではないとしている。第一号「海外消息」には「栗生(栗山茂と推測される)」「茅生(茅野蕭々と推測される)」「舎生(第二号以降の雑録欄にも見える。一人という意味でも特定の個人の筆名とも捉えられるが、内容・体裁から鷗外あるいは平野万里ではないかと推測される)」といった署名がそれぞれの記事の後ろに付けられている。岩波版旧全集著作篇

十七卷(一九三六年)の後記を書いた平野万里は、『スバル』第一号の編集者であり、当時の事情に詳しいが、「本巻は、鷗外先生が雑誌『スバル』を賑わす目的で海外からの通信に擬して第三号以降連続執筆された『椋鳥通信』及び『スバル』廃刊の後を承けて発行せられた雑誌『我等』に表題を変えて引続き載せられた『水のあなたより』を収めて一巻としたものである」と記し、第一、二号の「海外消息」を鷗外の著述に含めなかったことがわかる。注(17)参照。

(2) 平野の「抗議」文は六号、さらに反論を加える啄木の編集後記「消息」は五号で組まれた。啄木はこの後記のなかで「僅かに短歌を六号活字にしたる事によりて自ら慰めねばならぬなり。白状すれば、雑録を五号にしたるも、しまひに付ける筈なりし小生の『一隅より』を五号にするため、実は前の方の同活字にしただけなり」と述べている。ところが雑録のなかでも短歌会、パンの会など諸会合の様子を伝える「舍生」名の報告だけが六号に落とされている。ここで報告されたすべての会合に出席した唯一の人物、平野万里がこの「舍生」である可能性が高い。

(3) 「オスカア・ワイルドの詩」やシュニッター作「前途開く(DER WEGINS FREIE)」(ともに第四号)など、批評や抄訳、短歌といったジャンルのものが雑録欄に収められた場合、掲載号によっては五号活字で掲載されたケースもある。しかし、安定的、継続的な取り扱いではなく、全体として雑録欄はほぼ六号となった。

(4) 松木博「椋鳥通信」の表現実践(鷗外研究会『森鷗外「スバル」の時代』所収、一九九七 双文社)は、近松秋江の「雑誌『スバル』の「むく鳥通信」の無名氏は、森鷗外氏の随筆ということである」「(美術之日本)明治四十二年八月」という指摘を一例としてあげている。この中で松木は、記事発信の日付に着目することで無名氏のドイツ不在を証明し、その虚構ゆえの戦略性について論じている。

(5) E. J. ホブスボーム『資本の時代 1: 1848-1875』(柳父園近・荒関めぐみ・長野聡共訳みすず書房 1981。原著 E. J. Hobsbawm, The age of capital 1848-1875, Weidenfeld and Nicolson, 1975)

(6) 未来派研究第一人者のジョヴァンニ・リスタ(Giovanni Lista, Marinetti et le futurisme, L'Age d'Homme, 1977)。

(7) 長谷川泉「芸術的近代派の胎動」(『近代文学評論大系』第四巻月報、一九七一・一一一)

(8) 『通信事業史 第二篇』第十二章 外国郵便(通信省 一九四〇)

(9) 通信省発行「通信公報」を繰ると一九〇七年から本格化しはじめたシベリア鉄道の郵便利用について、猫の目のように変わる当時の混乱ぶりを確認できる。

I 「通信省告示第三百四十六号 自今露西亞宛郵便物ハ特ニ指定アルモノノ

外総テ西比利亞經由通送方取計フ 明治四十年五月三十日 通信大臣 山縣伊三郎

II 「通信省告示第五百四十一号 本月十一日以降欧州諸国(露西亞ヲ除ク)宛郵便物ハ特ニ西比利亞經由ノ指定アル信書及郵便書二限り西比利亞經由通送方取計フ 明治四十年九月九日 通信大臣 山縣伊三郎

III 「通信省告示第三百七号 来四月一日以降伯西兒、亜然的音共和国、「ウルゲー」及「パラゲー」宛郵便物ハ特ニ西比利亞經由ノ指定アル書状及郵便書二限り西比利亞經由通送方取計フ 明治四十一年三月二十三日 通信大臣 原敬

IV 「通信省告示第四百号 来二月十一日以降欧州諸国(露西亞ヲ除ク)、伯西兒、亜然的音共和国、智利、「ウルゲー」及「パラゲー」宛通常郵便物ハ特ニ西比利亞經由ノ指定アルモノニ限り西比利亞經由通送方取計フ 明治四十年九月通信省告示五百四十一号及同四十一年三月通信省告示第三百七号 来二月十日限り之ヲ廃止ス 明治四十二年一月二十八日 通信大臣 男爵後藤新平

(10) 『定本上田敏全集第一〇巻』(一九八一 教育出版センター)

(11) ジュール・ヴェルヌのフィクション「八十日間世界一周」には二週間あまり及ばぬものの、たんに速度を競うのではなく、「古今興廢の跡、文明富強の原、最新思想の潮流、現代技術の進歩」を諸国に見聞してこようとする企画として画期的な速度を成しえたのは、「倫敦のクック社といへば、先づ旅行案内業として世界第一であることは、殆ど誰知らぬ者もない」トーマス・クック社の全面的な協力があってのことであった。また、「東京朝日新聞」(一九〇七年一月四日(二十八日))は杉村楚人冠の一八回にわたる「露国横断記」も連載した。ここではシベリア鉄道の画期的な速度とあまりにも不明な運行状況についての感想がもたらされている。

(12) マンデスについては、以上のコ克蘭の記事についてつぎのように紹介された。「巴里からSt. Germainへ汽車に乗って行く途中で、車室の戸を開けて転び落ちたため、Cathulle Mendèsは頭蓋を砕き、右臀右足を軀幹から断たれて即死した。批評家として聞えておった人である。嘗てはRichard Wagnerの親友として知られたこともあった。年は六十八歳。此の悲惨な出来事のあったのは二月七日の夜であった。」

(13) 平野万里は『スバル』の最終年にあたる第五年(一九一三)第四号から第九号まで洋行先のベルリンから定期的に劇評を中心とした通信を発表し、創刊当時に挫折した企画をみすから実現させた。

(14) アンリは虚構であるとも実在する人物とも考えられる。仮にアンリが実在すると考える場合、滞仏期間から情報発信者としてのアンリは光太郎であり、受

信編集者は無名氏である鷗外を含め、与謝野寛、上田敏など多様な可能性が開かれたままとなる。その後『スバル』にアンの消息が紹介されることはなく、また、各個人全集に収録されている書簡にも対応するものが確認できないため、現時点ではたして誰がアンの役割を担ったか特定できない。しかし、まったくの虚構という場合、「わたくしの俸銭の大部分は内地の書肆と、ベルリン、パリの書估との手に入つてしまふ」(『洪江抽斎』) 鷗外の自作自演である可能性は文体的な特徴からも高い。

- (15) 宗像和重「森鷗外の在独通信―侗然居士『政海の波瀾』第一報の再検討―」(『文学』一九八八・五) 鷗外・明治四十一年三月十七日―上田敏宛書簡から―
〔森鷗外研究〕第九号 二〇〇二・九、ともに『投書家時代の森鷗外―草創期活字メディアを舞台に』(二〇〇四 岩波書店)に収録) からは教示されることが多かった。後者は、滞欧中の敏と鷗外との手紙のやりとりにおいて郵便の誤配や遅配といったデリダ的な問題が生じていることを論じている。

- (16) 「棕鳥」というネガティブな言葉を鷗外がポジティブな概念に読み換え、複数のテキスト(『洋学の盛衰を論ず』一九〇二、「混沌」,「奇跡」,「大発見」いずれも一九〇九、「雁」一九一〇―一九一五、「不思議な鏡」一九二二、「礼儀小言」一九一八)に繰り返し返したことについては竹盛天雄、清田文武、エマニエル・ロズランらによって重要視されてきた。竹盛天雄『混沌』への姿勢(『鷗外その輝き』第一回として『早稲田文学』一九七七・六に掲載、『鷗外その紋様』一九八四 小沢書店)一部修訂のうえ収録、清田文武『鷗外文学の研究青年期篇』(一九九一 有精堂)「第一節『舞姫』の世界」および「第二節 鷗外の故郷意識」,エマニエル・ロズラン「棕鳥・Phoenix・かもめ―鷗外文学における随筆の誘惑」(『早稲田文学』一九九四・七)。

(17) 岩波版旧全集著作篇第十七巻(一九三六)の後記のなかで平野万里は次のように述べた。「本編は以前出た何れの全集にも収められてゐない。多分巻数の都合で割愛せられたものと思はれる。併しものごものだといふ感じも同時に動いてゐたことは争はれない。果たしてさうであらうか。故上田敏先生は本通信を屢々話題に供された。又故小山内薫君は愛読の余りわざわざ切り抜いて一冊にまとめて置かれたやうに聞いている。以上の両氏が私の知る限りでは本篇を味読し得た少数読者の代表者である。」

〈付記〉本稿は、早稲田大学二〇〇四年特定課題研究(2004A-111)の成果の一部である。「棕鳥通信」の本文引用は初出『スバル』から行ない、それ以外の引用については『鷗外全集』(一九七二―七五年 岩波書店)によった。また今回の調査においては、コ克蘭兄弟とマンデスの死について報じる記事を、これまで有力な情報源とみられてきたBerliner TageblattとVossische Zeitungに探った

が、それぞれの死亡記事などは以下にまとめたように確認できたものの、「棕鳥通信」の記事内容と一致するものはなかった。

Berliner Tageblatt

コ克蘭兄…一月二十八日朝・訃報、二十九日朝・埋葬記事、三〇日朝・埋葬記事、三〇日夕・追悼文、二月四日朝 DER WELT SPIEGEL・写真付訃報、十六日夕・記念碑について

コ克蘭弟…二月九日朝・訃報、十四日 DER WELT SPIEGEL・写真付訃報

マンデス…二月八日夕・訃報、十二日朝・マンデス自身による散文、十四日 DER WELT SPIEGEL・写真付訃報

Vossische Zeitung
コ克蘭兄…一月二十八日朝・訃報、夕・死後の影響
マンデス…二月八日夕・訃報、二月九日朝・訃報追い書き、一〇日夕・訃報追い書き